
余りモン

大阪花子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

余りモン

【Nコード】

N5132B

【作者名】

大阪花子

【あらすじ】

2月14日。女の子の一大イベント・バレンタインデー。その日を恐れた平次が取った行動に和葉は……？

(なんでこうなったんや…)

冬の寒空の下、自分たちの縁側に座って、見慣れた庭を見ながら、オレはそう思っと思った。

「平次、なんで今日学校休んだん？」

オレの幼なじみの遠山和葉は、オレの隣に座りながら、明らかに機嫌が悪そうな顔つきと口調でオレに質問してくる。

しかもオレの方を見ようとせんと、オレとおんなじように庭を見ながら。…その様子が余計、機嫌の悪さを感じさせる…

「せやから、体調不良や」

「ふん…」

“絶対ウソや”

…と言わんばかりの和葉から出た言葉。

”ふ〜ん”っていうのは言葉なんかよう分からんけど…

「別にオレがいつ学校休もうがオレの勝手やろ」

「そっやね」

機械みたいな棒読み口調になった和葉の様子から、今のオレの言うた事に余計悪い悪したんが分かった。

「…あんだ、ズル休みやろ」

オレの核心を突くような和葉の言葉。

「ちやうわボケ」

オレも負けじと言い返す。

「何が体調不良や。いつもより顔色よろしいんとちやうつか」

「やいやいづるさいやっちな。体調不良以外の理由やったら学校

休んだアカンのかい」

「どーせつまらん理由のくせに」

「お前には関係ないやろ」

淡々と会話を続けてるオレ達やけど、お互いの顔も見んと、静かに怒ってるって感じやった。

「弱虫」

和葉がちっこい声でボソツと言ったのを、オレは聞き逃さんかった。

「はあ！？お前調子乗んなよ！」

俺は静かな言い合いにしびれを切らした。

ドンッ

縁側の床をおもつきしゲーで殴って、勢いよく立ち上がり、和葉を睨みつけながら、耳が潰れるくらいの声で怒鳴ったった。

「うるさいわ。へタレ」

和葉のことやから、オレの調子に合わせて怒鳴り返してくると思っ
たのに、まだ淡々と喋ってる。

…人間ってモンは、本気でキレたら、こんな風になるんやと思った。
そんな和葉に圧倒されたオレは、ちょっとびびってもうて、おとな
しく和葉の隣に座り直した。

流れる沈黙。

オレは、なんでこんな事になったんか、頭ン中で考えた。

今日、オレは学校を休んだ。

体調はすごくぶる良好やった。

でも休んだ。

どうしても休みたかった。

今は2月の真ん中らへん。

ちなみに今日は14日。

2月14日

そう、バレンタインデーや。

正直、オレはこの日が好かん。

やって、やたら女がオレに集まってチヨコ渡して来よる。

その事を男友達に話したら、『贅沢や』やら『文句言つな』やら、散々言われた。

和葉に話した時なんか、

『女の子が頑張って好きな男の子に告白する日なのに、そんな言う平次は最悪や!』
ってボロクソ言われた。

じゃあお前は毎年バレンタインに誰かに告ってんかって聞いたら、顔赤うしてはぐらかしやがった。

その男誰やねんって思った。

思い出しただけでもイライラしてくる...

…とにかく、和葉はあんな事言うと思ったけど、オレに近づいて来る女はたいがい”珍しい物見たさ”や。

本気でオレに告ろうとしてんやなくて、はつきり言うて”あの西の名探偵にチョコあげた”つちゅー自己満や。

そんな女が毎年毎年…しんどい。

それに、オレは甘いモンはあんま食わへん。

毎年大量のチョコを持って帰って来て喜ぶんは、以外にも甘いモン好きのオレンチの両親と、おすそ分けされに来る和葉のオトンだけや。

和葉も甘いモン好きなくせに、オレがもらって来たバレンタインチョコだけは食おうとせえへん。逆に、

『平次がもらったんやから、平次が食べな意味ないやろ!？』
つて怒鳴られる。

なんやこの女は、オレを虫歯だらけにさせたいんか？

そんなオレも、この女のチョコだけはちゃんと食べてた。

和葉は毎年、”作り過ぎた余りモン”のチョコを渡して来よる。

オヤジにもオカンにもおっちゃん達にもあげてるくせに、毎年オレには”余りモン”言うて渡して来よる。

そんな和葉の作るチョコは、あんま甘なくて、オレには丁度いい甘さやった。

でも作った本人はそれを食った時、

『うわっ！苦っ！ありえへん』

って絶叫しとった。

そこまで苦ない思うけど……ホンマ、リアクションデカすぎやわ。

あいつは毎年そうや。

バレンタインデーになったら機嫌悪なる。

それもオレがバレンタインデーが嫌いな理由や。

しかもオレにやいやい言うて来よる。

なんや知らんけど、それはオレのせいなんか？

まあ…そんなこんなで、オレはバレンタインデーが好きちゃう。

しかも昨日なんか、明日が待ちきれんくてチョコ渡しに来たっちゅー女が学校の校門の前にぎょうさんおった。

オレは昇降口でそれに気づいて、急いで裏門に逃げた。

…裏門にも何人かおつたけど…

(そんな時もらったチヨコはオカンにやった)

このままやったら、明日オレは女どもにもみくちやにされる…

嫌や…

やからオレは学校を休んだ。

朝、オカンには腹痛いってウソついた。

『ウソつきな!!』って言われたけど、ウソちゃうわって言って、朝からオカンとケンカした。

結局、『勝手にしい!』って言いよつたから、勝手にした。

ハライタっていうのはウソやけど、ズル休みやない。

ちゃんとした理由付きや。

そんで夜になって、自分の部屋でぼーっとしとつたら、和葉が来たってオカンに呼ばれた。

『縁側に和葉ちゃん待たしてるから早よ行きなさい』

『なんで縁側やねん。くそ寒いのに…。オレの部屋呼べや』

『何言ってるの！縁側の方がムーディーやろ？』

『はあ！？意味分からん』

ムーディーて…やっぱりオカンは昭和の人間やと、オレは改めて思った。

そんなオレに気づいてへんオカンは話しを続ける。

『和葉ちゃんな、あんたのために、わざわざチョコ作って持ってきてくれてんで！』

『和葉がオレのために？どうせまた作り過ぎて余ったヤツ持って来てんやろ？』

『はあ…。あんたアホやな…』

オカンはオレの肩に手を置いて、俯きながら深いため息をついた。

『なっ！なんやねん！？』

『あんななあ…余りモンのチョコ渡すために、毎年毎年、いちいちあんな可愛らしくラッピングするか？』

『……………』

『…本命チヨコに決まってるやろ？和葉ちゃん、意地張って”余りモン”言ってるだけやで？』

『…な…なんでそんな分かんねん？』

『分かるわな！おんなじ女やねんから』

『オカン、女やったんか…』

『あんだシバかれないんか…？』

『いえ…』

『とにかく！早よう縁側行きなさい！女の子待たしたアカンよ！』

『分かったからニヤニヤすんなや！』

(ホンマきつしよいオバハンやな…)

“本命に決まってるやろ？”

…何勝手に決めてんねん、あのオバハンは。

でも、オカンにそう言われたオレも、案外まんざらやなかった。

なんでやるの？和葉はオレの子分やからか？

和葉の本命チヨコ（オカン曰わく）のわくわくと、自分の心に見え隠れするもやもやを抱えて、オレは和葉の待つ縁側へ向かった。

しかし、当の和葉はというと、機嫌が悪いです。と言わんばかりに不機嫌オーラが出とった。

確かに和葉は、きれいにラッピングした物を座ってる膝の上に置いてた。

でも、その場の空気は、ムーディーでも何でもなかった。

今から本命チヨコを渡す、という雰囲気では……決してなかった。

とりあえず、オレは和葉の隣にすわる。

こうして冒頭に至る。

和葉の怒ってる理由は分かる。

オレがバレンタインデーに押し寄せて来る女どもを嫌がって学校を休んだからや。

やからさっき、”弱虫”やの”へタレ”やの言つてたんや。

オレの推理は十中八九当たってるやろう。

でも、そんな事より気になる事がある。

和葉の膝の上でおっちんしてるチヨコらしき物。

オカンの言葉がよみがえる。

“本命チヨコに決まってるやろ？”

せやったら、ちゃっちやとよこせばええのに…

なんかオレまでイライラしてきた。

「…バレンタインデーはな…」

「へ？」

ずっと黙りこけたとった和葉が口を開いた。

今度は俯いて。さっきと一緒に静かな声やけど、なんかちやう。

ってなんで泣きそうになってんねん!?

「か…和葉…どないしてん？」

この女を泣かすとやっかいな事になる。

オカンは怒る。

オヤジはキレル。

おっちゃんは……恐ろしくて考えたくもない…

「バレンタインデーはなあ…」

「か…和葉…なんや？ちゃんと聞いてるで？」

オレは精一杯の優しい声と笑顔で和葉の顔を覗き込んだ。

でも実際は、しどろもどろで苦笑いやったと思う。

和葉がスゴい目えで睨んで来とつたから。

「バレンタインデーはなあ〜…女の子にとって大切な日いなんや！」

そして、オレに向かって吠えるように怒鳴り出した。

とりあえず、いつもの和葉に戻って、オレは安心した。

「分かった分かった！で？これはオレのンなん？」

意地悪く笑いながら、和葉の膝に乗ってるモンを取り上げる。

「あっ！ちようアカン！」

「なんでやねん？今年もオレにくれるんやろ？」余りモン”」

和葉は必死に取り返そうとして、腕を伸ばすけど、オレはもっと腕を伸ばして対抗する。

なんか、オレからチヨコを取り返そうと身を乗り出してオレに近付いて来た和葉の顔に、一瞬心がくすぐられた。

「はあ」

和葉はあきらめたんか、オレから離れて深いため息をひとつついた。

「…しゃーないからあげるわ。平次今日一日中家にこもってたんやろ?」

「おう」

「せやったら、まだ誰からもチヨコもらわれへんもんね。流石にそれはかわいそうやし」

「そりゃどうも」

昨日何個ももらったんやけど…それはあえて黙っとこう。

「それにしても和葉」

「なに?」

「なんで毎年オレだけ余りモンやのに、こんなちゃんとラッピングしてん?」

「そ…それは…」

「それは？」

「…余りモンでも、ちゃんとした方がええと思って…」

暗くてよう見えへんけど、なんとなく和葉の顔が赤くなってる気がした。

「あ、そお」

ちゃんとしたら”余りモン”やなくなると思うけどな…

“ホンマは本命チヨコやねん”

なんて言葉をちょっと期待してしまったオレ。

でも、和葉からさっきみたいな答えが返って来て、安心した。

やって、本命なんか言われたら、和葉オレのこと好きって事やる？

そんなん、正直どうしたらええか分からんもん。

「平次、和葉ちゃん。もうそろそろ入っといで。体冷やしたアカンよ?」

ちょうどオレと和葉の会話がひと区切りついた時、タイミング良くオカカンがオレ達を呼んだ。

タイミング良すぎる…

聞き耳立てとつたなこのオバハン…

和葉は”はい”と機嫌よう返事して居間に入っていった。

それを見たオレも後に続いて入ろうとした時、障子を開けて待つとつたオカカンにこう耳打ちされた。

「あんたホンマ男らしいな！全然進展してへんかったやん！」

進展て何がじゃ。

「意味分からん事言うなやオバハン」

オレは捨て台詞を残して居間に入って行った。

バレンタインは嫌いやけど、和葉からチョコもらって、嬉しく思う自分がある。

それは和葉がオレの子分やからか、それ以上か、今はまだ分からんけど…

いつか分かる日が来るまで、あの”余りモン”が”本命”に変わる事を、心の隅っこで祈っていたわ！

〜次の日〜

「平蔵さん、和葉ちゃんのチョコ、エライおいしかったねえ」

「せやなあ。甘くてうまかったわ」

「何言つとん自分ら？今年のも甘さ控えめでちょうど良かったっちゅーねん！」

「あなたこそ何言つてんの？和葉ちゃんのくれるチョコは、毎年甘くておいしいねんで？」

「でも、オレ食つたんはそない甘なかつたで」

「…それってもしかして…」

「そついう事やな」

「なんやねん？どついう事やねん？」

「おはよつございまゝす！平次ー、学校行くでえ！」

「そんなでつかい声出さへんかて聞こえとるわ」

「チョコおいしかった？」

「いつも通りの味や。」

「そつか」

「なんや、えらい機嫌ええやんけ」

「うせやん？アタシ普通やで」

「ふ〜ん…ま、ええわ」

「そうそう 気にしたアカン！」

和葉の上機嫌の理由が分からんままオレは和葉と一緒に1日ぶりの学校へ向かった。

でも、なんでオレのンだけ甘ないんや？

もしかして、甘いん苦手なオレのためだけに…？

……………まさかな。

少し自惚れが入って、気分を良くしてたオレやったけど、校門に集まった女どもによって、1日遅れの地獄のバレンタインデーを味わう事になる…

おわり

(後書き)

初めまして。大阪花子と申します(^^)

平次の和葉に対するビミョーな心の変化が表現できてたら良いと思います。

初めての平和小説だったので、読み苦しい所があることをお許し下さい。

感想などいただけたら嬉しいです(^^)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5132b/>

余りモン

2010年12月28日03時12分発行